

第21回 軽井沢トップセミナー

特別講演

2015・8・6 軽井沢・ホテル音羽ノ森

「イキイキと元気に生きるコツ」 —どうとるマンボウ家のてんやわんや

エッセイスト 斎藤由香さん



＜斎藤由香さんプロフィール＞
さいとう ゆか ●成城大学卒業後、サントリー株式会社に入社。自称「窓際OL」として、会社員を続けながらエッセイストとして活躍。著書に『窓際OLトホホな朝ウフの夜』、『猛女とよばれた淑女・祖母・斎藤輝子の生き方』(新潮社)などがある。祖父は歌人・斎藤茂吉、父は作家・北杜夫

私はサントリーの社員ですが、現在、サン・アドという広告制作会社に出向しています。はじめに、このサン・アドがどのような仕事をしているのかについて、説明させていただきます。

壽屋宣伝部に集まつた才能豊かな作家たち

サン・アドは、今から50年前、佐治敬三、開高健、山口瞳、そしてアンクル・トリスの生みの親であるイラストレーターの柳原良平らを創業者として作られた広告制作会社です。創業メンバーになぜ芥川賞作家の開高健や直木賞作家の山口瞳がいたのか。それは佐治敬三とある女性の立派話がきっかけでした。

開高健さんの奥様は、詩人の牧羊

子さんです。この方は奈良女子大を卒業後、壽屋の研究員として働いていました。ある日、牧さんが研究所の廊下を歩いていると、偶然佐治さんに出会います。「佐治さん、佐治さん、私の旦那がこんな詩を書いてるの。ちょっと読んでくれない?」と手渡したのが、当時開高さんの作品が掲載されていた『えんぴつ』という同人誌でした。

半年後、二人は同じ廊下で再び出会います。「実は私、お腹に赤ちゃんがいるの。もうすぐ働きなくなるから、替わりにウチの旦那を雇つてもらえないかしら?」「よし、わかった。あなたを辞めさせてご主人を雇う」というわけで、当時無職だった開高さんの入社があつさり決まりました。偶然出会った二人の立ち話をからトレードが成立したという、サントリー

の歴史に残るお話です。

廊下で渡された同人誌のたつた数行に開高さんの才能を見出し、半年先までずっと覚えていた。そこが佐治敬三のすごいところだと思います。

百年ほど前、ウイスキーは全く日本になじみがないものでした。N H K の「まつさん」でも放映されましたが、誰も飲んだことがない、聞いたこともないウイスキーの魅力

を伝えるには、お客様の心に残るような言葉、コピーを創らないといけない。そう考えた佐治は、壽屋の宣伝部に開高健を異動させました。

さっそく仕事を始めた開高さんは、PR誌『洋酒天国』を創刊(昭和31年)。当時としてはめずらしいヌードグラビアあり、ウイットあふれるエッセイあり。ユーモアと遊び心たっぷりのこの冊子はたちまち大評判となりました。

入社もなくして山口さんも直木賞を受賞。それぞれ作家生活と壽屋の勤務があり、このままだと才能豊かな二人に辞められてしまします。東京オリンピックが開かれた1964年、サントリー宣伝部から独立、サン・

た。無料配布されるサントリーバーには全国からお客様が詰めかけます。

作品が芥川賞候補となり、いよいよ執筆活動が忙しくなった開高さん。年4回だった『洋酒天国』の発行が滞り、お客様からのクレームがきます。困った開高さんは、社長にも役員にも了承を得ず、「壽屋社員求む。35歳まで」という広告を冊子に掲載しました。応募してきたのが当時36歳の山口瞳さん。勤めていた河出書房社が倒産し、小さなお子さんもある身の上でした。面接したのはもちろん開高先生です。

入社もなくして山口さんも直木賞を受賞。それぞれ作家生活と壽屋の勤務があり、このままだと才能豊かな二人に辞められてしまします。東京オリンピックが開かれた1964年、サントリー宣伝部から独立、サン・

アドという会社が誕生しました。

日本で最も歴史あるクリエイティブ・エージェンシーとして

サントリリーがビールを発売したのは昭和38年のこと。他のビール会社が先行するなか、「ウイスキーの味をする」と叩かれ、「佐治が匙を投げた」などと書かれたこともあります。ビールの赤字はそれから45年も続きました。

私が入社したのはちょうど焼酎ブームが起つた頃です。ウイスキーは古いお酒というイメージが定着していました。銀座のバーでも焼酎が飲まれ、町の酒屋さんにも焼酎を買入る人ばかりです。今はサントリリにはウーロン茶などの清涼飲料や健康食品などがありますが、当時はウイスキーもビールも全く売れないたいへん厳しい時代でした。

近頃は角瓶のハイボールが若い世代にも人気です。ウイスキーの炭酸割りとは思っていない人も多いそうです(笑)。「まっさん」効果もあり、今、再び、ウイスキーに新しいページが開いたように思います。長く赤字が続いていたビールも、プレミアム市場でお客様に手に取っていただけるようになりました。

2005年、サントリリーの新しい口

ゴとコープレートメッセージをサン・アドが制作しました。いくつもの候補から選ばれたのが「水と生きる

SUNTORY」というメッセージです。これは日経BP社が主催する企業メッシュセージの高感度ランキングで3位にランクインしました。

サントリリーウーロン茶、黒烏龍茶のトータルプランディングでは「サン・アドならではの人間味あふれる表現で日本にウーロン茶カテゴリーを定着させています。他にはプレミアムモルツ、山崎、白州などのCM制作なども行っています。

いつかこの味をわかつていただきたい——。ウイスキーやビールの生産部門は何十年もそういう気持ちで一生懸命作ってきたわけです。商品の魅力、パッショントをいかにストレートにお客様にきちんと届けられるかをずっとと考えてきた会社です。

サントリリーのグループ会社としてウイスキーの広告をメインにスタートした会社ですが、徐々にいろいろな会社のコピーや広告の企画、立案、デザインなど制作領域を広げてまいりました。

長年サントリリーの仕事で培つてきたシズル(おいしさ)、ワクワク感、人間味ある表現のノウハウがあり、店舗や商品パッケージのデザインも得意としております。皆さま方の会社

が店舗やロゴなどのリニューアルを考える際には是非ご提案のチャンスを頂けたら有難く思います。よろしくお願い申上げます。

好奇心旺盛なわがままお嬢様 気高くも烈しい祖母・輝子の生涯

私の祖父が歌人の斎藤茂吉、父が作家の北杜夫で、本日は作家の家がどんなに悲惨かというお話をさせていただこうと思つております(笑)。それでは茂吉の妻、祖母・輝子の話から進めさせて頂きます。

明治28年に生まれた輝子は、東京

青山にある大病院の娘として何自由なく育ちました。当時は精神病に対する理解がなく、患者さんを閉じ込めて治療にあたるのが普通でした。が、青山脳病院は散歩ができる広い中庭もあり、まるでお城のような建物でした。敷地は四千五百坪。これほど大きな西洋建築が青山のどこにあつたのか、今では想像もつきません。

入学した学習院女子部の院長は乃木希助大将でした。晩年、輝子から「馬に乗つて見回つておられたのよ」とよく聞かされたものです。人力車の通学は禁止されていたにもかかわらず、妹と一緒に青山から人力車で通つていたとのことです。

斎藤家には男の子がいなかつたた



青山にあった4500坪の青山脳病院

め、輝子の父は跡継ぎとしてふさわしい優秀な少年を探していました。上山で神童とうたわれていた守谷茂吉です。輝子が9歳、茂吉が15歳の時に婚約。輝子が19歳になった年に結婚させられます。

山形の農家で質素に育った茂吉とわがままお嬢の輝子とでは、生まれも育ちも正反対。誰が考えても上手くいくはずありません。これが茂吉と輝子の不幸の始まりでした。

精神科医でありながら、歌人としても文壇で名前が売れ始めていた茂吉は、大正10年ドイツ・ミュンヘン

週間前に切れていたといふ不運も重なり、翌日からお詫びや金策に迫わされることになります。歌をつくるときの茂吉は「わなわなと震えて、側に寄るのも怖かつた」

茂吉の留学生活を終える直前、好奇心旺盛で怖いもの知らずの輝子は突然「ヨーロッパを見てみたい」と言い出します。若い女性が一人で海外に行くなど考えられない時代でした。50日間の船旅の末、茂吉との再会を果たしますが、夫婦の仲は最悪だったといいます。

日本に帰ってきた二人を待っていたのは、病院が全焼したという知らせでした。茂吉がヨーロッパから少しずつ送っていた大量の医学書もすべて灰になつていました。火災保険が

に留学。2年後の関東大震災では青山の病院が大きな被害に遭いました。



左から北杜夫氏、斎藤輝子さん、北の兄である精神科医・斎藤茂太氏

と父から聞いたことがあります。病院再建という重責を担い、苦悩する茂吉。気持ちちはあつても素直に手を差し伸べることができない輝子。あまりに強烈で個性的な二人はお互いを理解できないままで、12年間の別居生活に入ります。

戦争中、輝子が家族と一緒に住んだのは、根が腐った畳を歩くとずぶずぶと足が沈む、風呂なし、水道なし、雨戸もないボロ屋でした。「お義母様、あまりにお氣の毒で申し訳ないです」と伯母が涙を流しても、輝子は平然としていたそうです。それぞれの部屋に、「珊瑚の部屋」とか、「真珠の部屋」と名前をつけるなど、一番元気で明るかつたと聞きました。

育児はすべて松田の婆やに任せきりで、掃除や炊事などの家事などは一切しなかつた輝子でしたが、晩年茂吉が一人で身の回りのことができなくなると、かいがいしく世話を焼くようになります。最期は下の世話までしたとのこと。あんなに仲が悪かった輝子が年老いた茂吉の世話をす

る姿に、父はたいへん驚き、初めて二人を理解することができたといいます。その辺りのことは新潮文庫の『母の影』という父の作品に描かれていて、そこには、「世界百八ヶ国を踏破したスーパー・レディ」と題して茂吉を見送ると、輝子の第二の人生がスタート。大正時代に初めて観たヨーロッパが忘れられず、日本脱出を図ります。昭和35年、まだ日本人が自由に海外に行けなかつた時代です。

79歳で南極、80歳でエベレスト、85歳でガラパゴス……。それまで誰も行つたことのないモンゴルにも日本から初めて企画されたツアリーに参加しています。エベレストのトレッキングは、さすがに危険すぎると家族が猛反対しました。「万が一体調を崩したら皆さんにも迷惑がかかります。これからは箱根や熱海の温泉でご満足ください」と伯父が諭すと、「あら、嫌よ。もう申し込んだわ」と平然としていたとのことです。

89歳で大往生を遂げるまで海外百八ヶ国を踏破。いちばんのお気に入りはアフリカで、10回以上訪れました。晩年「徹子の部屋」に出演し

つねに前向き、マイペース世界百八ヶ国を踏破したスーパー・レディ

茂吉を見送ると、輝子の第二の人生がスタート。大正時代に初めて観たヨーロッパが忘れられず、日本脱出を図ります。昭和35年、まだ日本人が自由に海外に行けなかつた時代です。

79歳で南極、80歳でエベレスト、85歳でガラパゴス……。それまで誰も行つたことのないモンゴルにも日本から初めて企画されたツアリーに参加しています。エベレストのトレッキングは、さすがに危険すぎると家族が猛反対しました。「万が一体調を崩したら皆さんにも迷惑がかかります。これからは箱根や熱海の温泉でご満足ください」と伯父が諭すと、「あら、嫌よ。もう申し込んだわ」と平然としていたとのことです。

どくどるマンボウのてんやわんや
—躁うつ病の父と暮らして

父、北杜夫（本名・斎藤宗吉）は茂吉の次男として生まれ、幼少期には昆虫採集に明け暮れていたそうですが、将来の夢は昆虫学者になること。旧制松本高校時代に信州の自然に魅



「ホテル音羽ノ森」会場風景

せられ、晩年は何度も上高地を訪れて います。

茂吉の反対に遭い、昆虫学者を諦めて東北大学医学部に進学。精神科医となつた父は船医としてヨーロッパに渡りました。慶應の医局に就職が決まつていた父が、マグロ調査船の船医に応募すると言つた時、伯父や伯母は「小さな船なので沈没が心配だ」と反対したのですが、母の輝子だけが「あら面白いわね。行つてらっしゃいよ。男の子は苦労しなきやいけません」と背中を押してくれたそうです。後にその航海の顛末が『どくとるマンボウ航海記』として出版されました。

はチューリップやバラなど季節の花が咲き乱れ、食卓には手づくりの洋食が並びます。私が幼稚園の頃の父はとても優しく穏やかで、いつも「ごきげんよう」と挨拶する皇室アルバムのような家族でした。商社マンの家で普通に育った母は、この幸せが

うつ病を繰り返し、母と私は何が起
こつたのかわからず戸惑うばかりで
した。当時は「躁うつ病」という病
名も知られていません。母が偉かつ
たのは父の病気を深刻にしなかつた
こと。喧嘩はしても、わが家にはい
つも何かしら「笑い」がありました。

「心が楽になる生き方」

してたのよ！」とおしゃっていました。お父様の阿川弘之先生から「遠藤の家を見ろ！ 北の家を見ろ！」とよく言われていたのだそうです。

の支えにしていたことです。佐和子さんにお会いした時に話したら、「えっ？ 私も由香ちゃんを心の支えにしてたのよ！」とおっしゃっていました。

二二二

茂太のスピードやエッセイはいつもユーモアたっぷりでした。ユーモアや笑いがあればストレスはたまりません。私自身とても大切なことだと思います。

子どもの頃から—作家なんて最低。

人間がまともに生きるにはサラリーマンが一番」と思い、何が何でも普通の勤め人になると決めていました。

員でございます（笑）。

今日、お話をさせて頂いている軽井沢には毎年夏に家族で滞在していました。中軽井沢の別荘に遠藤周作先生たちが来られて賑やかに過ごしたことも懐かしい思い出です。

本日は貴重な時間をいただき、誠にありがとうございました。これからもよろしくお願ひ致します。

いろいろな場面でストレスを抱えることが多いのではないでしょうか。

8割で満足感をもつていて、日本人は真面目で、自分と他人を比較する傾向があるようです。仕事

でも人間関係でも完璧を求めず、8割くらいで満足する方がいいのではないでしょうか。

茂太のスピーチやエッセイはいつもユーモアたっぷりでした。ユーモアや

笑いがあればストレスはたまりません。私自身とても大切なことだと思います

つています。

人間がまともに生きるにはサラリーマンが一番」と思い、何が何でも普

通の勤め人になると決めていました。といつても、別に大きな仕事をしてからつけてくる、はつゆう芸術

いわゆる窓際員でございます(笑)。

井沢には毎年夏に家族で滞在していました。中軽井沢の別荘に遠藤周作先生たちが来られて賑やかに過ごしたことも懐かしい思い出です。

本日は貴重な時間をいただき、誠にありがとうございました。これからもよろしくお願ひ致します。